

# 薬師寺西僧房出土須恵器小考

## 1 はじめに

薬師寺西僧房は1974年に奈良国立文化財研究所が調査し、既に報告書が刊行されている。西僧房は天禄4年(973)に焼失したことから、出土資料は、使用年代の下限がわかる一括資料として注目される。本稿では、須恵器に焦点を絞り、未報告資料の紹介及び須恵器の年代や産地等に考察を加え、報告書の見解を深めたい。

## 2 須恵器の生産地について

薬師寺西僧房が焼失する前の9世紀～10世紀段階の近畿地方の主要窯跡群は、和泉・陶邑窯、丹波・篠窯、東播磨諸窯、西播磨諸窯が挙げられる。東海地域の製品を除くと、薬師寺西僧房出土須恵器もこれらの生産地から供給されたと考えてよいだろう。

小型壺(図78-8・10)は、報告書で指摘されているように、篠窯産である。10は徳利形を呈し、西長尾5号窯(10世紀中頃)と同時期の所産と考えられる。8は石原畑2号窯焚口(9世紀後半)から類似品が出土している。西僧房出土須恵器食器類も9世紀所産にみえることから、

973年の廃絶段階には古手の須恵器が残存していたと考えられる(吉田恵二・巽淳一郎「第Ⅵ章考察B土器」『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所、1987)。

鉢(6)は篠窯産である。西長尾5号窯(10世紀中頃)に類似品がみられる。10世紀代の篠窯産鉢の口縁部形態は、図78の4から順に7へと型式変化を遂げていく。篠窯特有の玉縁状口縁部を有する点、焼成が甘く、瓦質化している点などが10世紀前半以降の篠窯産鉢の特徴である。都城周辺で数多く出土する。

盤状の鉢(2)は筆者が再実測したもので、報告書に掲載されていた図面(PL.109-138)よりも器高がやや浅く、体部の開きも大きくなる。底部へラおこしである。内面に摩耗痕がみられ、搗鉢として利用した可能性が高い。プロポーションが古代の盤の形状から、より中世の東播系搗鉢の形状に近いと評価できる。古代の盤状の鉢(1)と中世の東播系搗鉢(3)との違いは、前者は底径に対して口径が大きく、体部たちあがり緩やかであるのに対し、後者は体部の傾斜がより急である。

図示はしなかったが、甕は尖った丸底であることなどから、東海地方の製品ではなく、近畿地方周辺のものとして推定できる。9世紀以降の篠窯では、組成における甕の割合が極めて低く、陶邑窯における甕の生産・供給の役割は、播磨に受け継がれていったといえる。西僧房出土

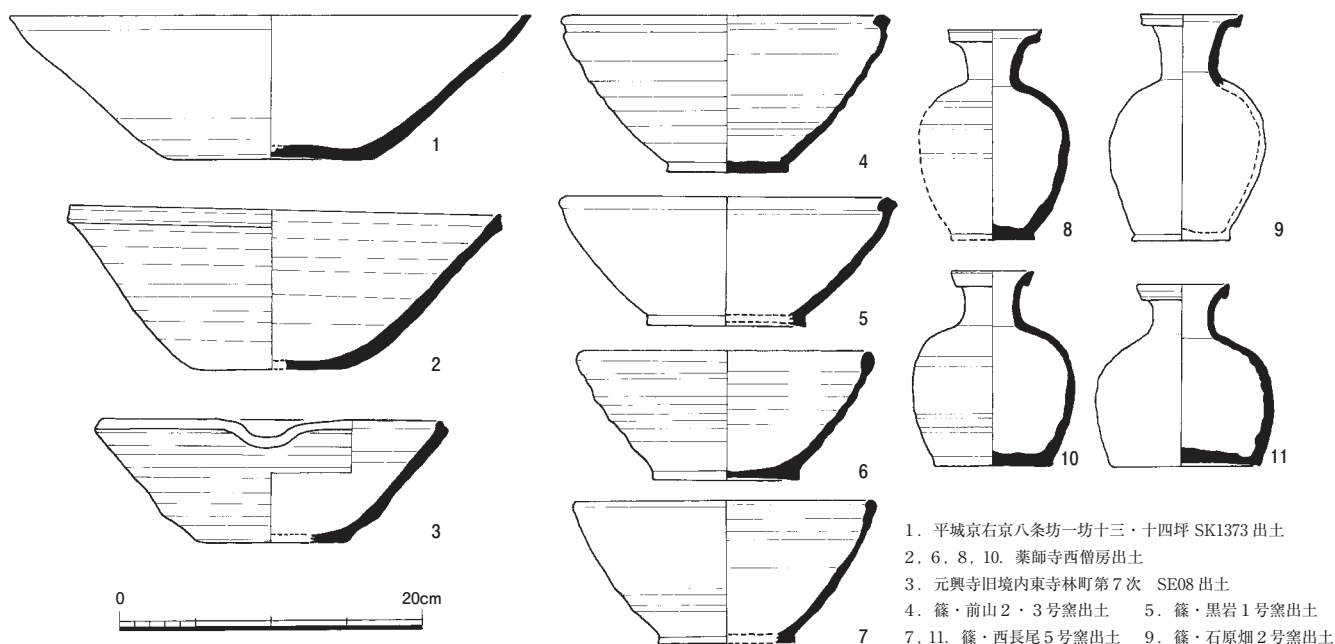


図78 西僧房出土須恵器と生産址出土須恵器 1:5

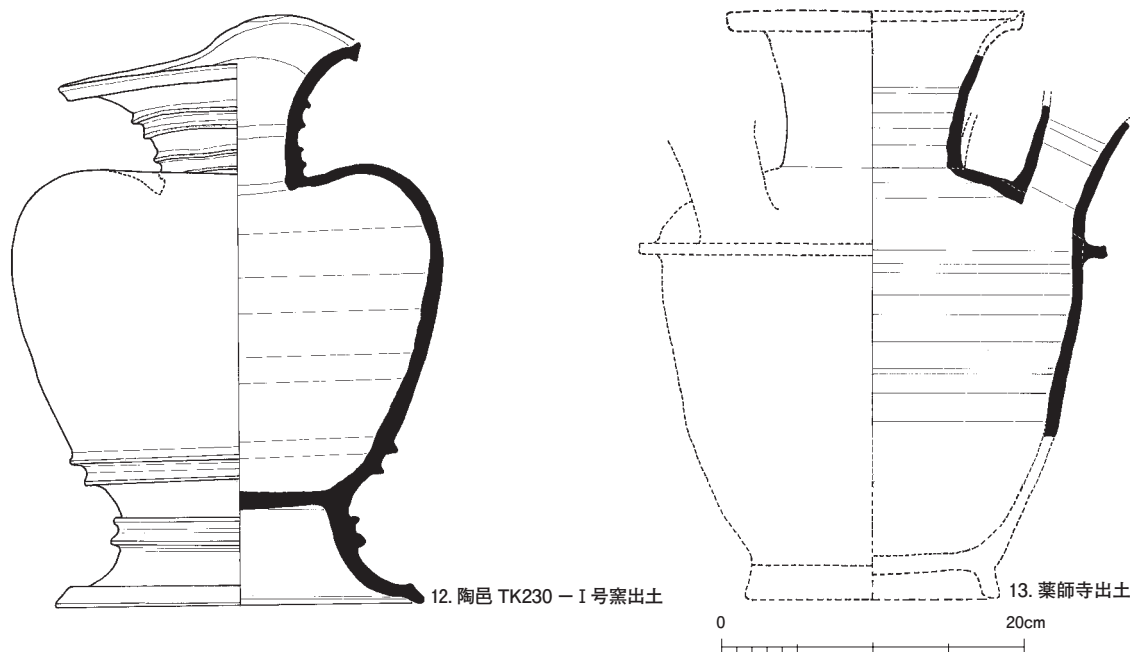


図79 須恵器で作られた仏具 1:5

甕は、陶邑窯の最終段階で生産されたものが伝世したと考えることもできるが、近畿地方で10世紀以降甕生産の中心地になっていくのが東播磨であることから、陶邑産または播磨産の製品ととらえておく。

### 3 須恵器で作られた仏具

未報告資料の中に、1968年の講堂・東回廊の調査で出土した須恵器の多嘴壺がある（図79-13）。口縁部周辺5カ所に小さな口縁が取り付く。6カ所の可能性も皆無ではないが、残存している3カ所の接続部をもとに復元する限り、5カ所が妥当と考えた。肩部に1条の突帯を施すのが特徴である。須恵器で作られた仏具として、鉢Aはよく知られるが、それ以外で須恵器の仏具が南都の大寺院で使用されていたことがわかる貴重な資料といえる。東僧房からも、肩部に3条の沈線を施す須恵器多嘴壺が出土している。多嘴壺を須恵器で製作する例は珍しいが、陶邑窯最終段階の窯であるTK230-I号窯（9世前半～中頃）では、同じく仏具である花瓶を生産している（12）。よって、陶邑窯で須恵器多嘴壺を生産していたと想定することは十分可能であるが、突帯壺の産地が播磨であることから、本例は播磨産の可能性が高い。

突帯壺に関しては、既に報告書で指摘されている通り、10世紀以降の西播磨に類例が多い。多嘴壺や花瓶についても、突帯を施すなどの趣向が類似している。また、播磨地域では、突帯の代わりに沈線を施すものもあり、東僧房の多嘴壺を想起させる。突帯壺と大型の花瓶・多嘴

壺は法量も類似し、また多嘴壺も花生けとして利用されていたことから、想像を逞しくすれば、西僧房出土の突帯壺も花瓶として利用されたと考えることができるのではないだろうか。

これら須恵器で作られた仏具は、金属品で足りないものを土器で写したものである。金属器写しの須恵器は7世紀段階から知られるが、平安時代以降の須恵器で作られた仏具は、9世紀初頭に伝来した密教との関わりの中で新しい展開を迎えていく。

### 4 おわりに

以上みてきたように、薬師寺西僧房出土の須恵器は、鉢や小型壺は篠窯産だが、盤状の鉢、大型壺（突帯壺）や甕類は篠産と特定することは難しく、別の産地を考えるべきであろう。小型壺に関しては、播磨地域ではほとんど生産されておらず、篠窯をはじめとする平安京近郊の窯がその生産を担っていたと考えられる。いっぽう、盤状の鉢に関しては、類品が東播磨の生産地で出土している。細部の型式特徴の認識を深める必要があるものの、東播磨地域で生産された可能性があり、11世紀末以降、平安京をはじめとする西日本各地で出土ようになる東播系播鉢の初現的な要素をもつ資料と評価できるであろう。西僧房出土の須恵器は、9世紀以降の近畿地方諸窯の再編・消長を具体的に反映しているもので、平安時代の須恵器生産を考える上で重要な資料と評価できる。

（木村理恵）